

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

(6) 昆虫類 ① カメムシ目

カメムシ目（半翅目）はチョウ目、コウチュウ目、ハチ目、ハエ目に次いで数多くの種を含む昆虫群で、日本からはこれまでに3,700種以上が記録されている。この目は、かつては同翅類と異翅類に二分されていたが、分子生物学的情報も含めた総合的な系統解析による近年の分類体系では、カメムシ目はキジラムシやアブラムシ、カイガラムシなどを含む腹吻亜目、セミやアワフキムシ、ヨコバイ、ウンカなどを含む頸吻亜目、カメムシやタガメ、アメンボなどを含む異翅亜目の3亜目からなるとする考え方が一般的になりつつある。

このうち異翅亜目を例にとると、一般的なカメムシの仲間が含まれる陸生カメムシ類はおよそ1,100種を超え、タガメやアメンボなどの水生カメムシ類は200種近い種が国内に生息している。しかし陸生カメムシ類のうち特に微小種を数多く含むカスミカメムシ類は、現在までに優に400種を超える種が明らかになっているが未だ数多くの未記載種の存在が考えられている。またサシガメ科やナガカメムシ類などについても追加種が十分に考えられる状況であり、他の2亜目も含め分類学的研究が十分に進んでいるとはいえない昆虫群である。

加えて、温暖化や国際的な物流の発達などの要因に伴う外来種の国内への侵入例も数多く報告されるようになり、分類学的研究の進展以外の理由でも我が国のカメムシ目昆虫の種数は増加の一途を辿っている。

埼玉県からこれまでに記録されているカメムシ目昆虫は1,057種にのぼり、そのうちの255種が腹吻亜目、342種が頸吻亜目、460種が異翅亜目であるが、いずれのグループも十分な調査が行き届いているとは言い難く、今後も丹念な調査を続けていくことで数多くの種の追加の可能性はある。

これまでのカメムシ目の掲載種数の変遷をみると、初版では52種をあげ、このうち頸吻亜目が20種、異翅亜目は水生カメムシが16種、陸生カメムシが16種であった。改訂版では初版のリストに含まれていたナカノテングスケバ、ミズムシ、ムラサキカメムシの3種をリスト外とし、新たにビロウドサシガメ1種を加えて50種とした。さらに前版ではヒロズウンカ、マエグロハネナガウンカ、タカイホソアワフキ、ウスブチミヤクヨコバイ、ヨコヅナサシガメ、ウシカメムシ、ナカボシカメムシ、アオクチブトカメムシの8種をリストから外し、水生カメムシのミゾナシミズムシと陸生カメムシのチャイロカメムシ、ヒメナガメの2種を加えて45種をレッドリストに取り上げた。

今回は生息状況の推移や記録の減少などの視点から前版のリストに水生カメムシのマルミズムシと陸生カメムシのアカヘリサシガメ、キイロサシガメ、シロヘリツチカメムシ、タマカメムシ、イネクロカメムシの5種を加え、水生カメムシのハネナシアメンボをリスト外として50種を掲載した。

今回の掲載種数を県産カメムシ目昆虫の亜目ごとの総種数と比較すると、まず頸吻亜目15種という種数は、頸吻亜目総種数342種の約4%にあたる。異翅亜目の水生種16種は、同じく水

生種の総種数 55 種から外来種 1 種を除く 54 種の約 30%にあたり、陸生種 19 種は同じく総種数 405 種から外来種 8 種を除く 397 種の約 5%にあたる。

なお、頸吻亜目及び異翅亜目については、県外から持ち込まれた植物などから発生したと思われるいわゆる随伴移入とみられる記録や、飼育個体由来と思われる採集・目撃記録などが増加傾向にあるのも近年の特徴である。

このように自然分布か否かを明確に判断できない分布情報も増加しているため、頸吻亜目及び異翅亜目については埼玉県内で記録されている全ての種を対象に調査を進めてきたが、腹吻亜目については微小種も多く、これまでに蓄積された分布情報なども十分でないことからレッドリスト対象種としての調査はおこなっていない。

埼玉県のカメムシ目昆虫相は、県南部の低地帯から秩父地方の亜高山帯まで多様な種に富んでいて、中でも標高 50m から 800m にかけての台地・丘陵帯から低山帯に生息する種は種類、個体数ともに多い。また、秩父地方を中心とした 800m を超える山地帯と亜高山帯には豊かな植物相が広がり、樹林層を形成する木本性植物、加えて林縁や林床などの草本植物は多様性を示している。こうした地域に生息するカメムシ目昆虫は種類も多く、希少種も数多く見られ、重要な生息地となっている。

これは、陸生の大部分のカメムシ目昆虫は餌資源となる植物と極めて密接なつながりをもって生活しており、特に寄主植物の選択範囲が狭い種については、寄主植物の有無がそのままその種の生存の可否に直結しているため、植物の多様性が陸生カメムシ目昆虫の豊かさを維持している大きな要因となっている。

それに対し、水生のカメムシ目昆虫の多くは捕食肉食性で、これらは餌資源の有無だけでなく生息場所である河川や池沼・湿地の様々な要因が生息の制限要因になっている場合も多い。たとえば河川などの流水環境では、流速や水面の照度、あるいは川底の形状などの複数の要因が生息の制限要因になっている種が知られている。また池沼などの止水域では水深や水面の照度のほか、泥質の水底の有無や産卵基質となる特定の水生植物の有無などが制限要因になっていると考えられる種もある。

このように、陸生カメムシ類に比較して水生カメムシ類の環境選好性の幅はより狭く、必要な環境要因の 1 つでも欠落すると生息できなくなる場合が多いことが、水生種がレッドリストに取り上げられる割合が多くなっている原因と言える。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、日本昆虫目録第 4 巻 準新翅類 (2016)、日本原色カメムシ図鑑 (第 1 巻, 友国ほか 1993; 第 2 巻, 安永ほか 2001; 第 3 巻, 石川ほか 2012)、および環境省 (2015) を参照した。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名 ヨコバイ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2015) -
 (和名) **ナカハラヨコバイ**
 (学名) *Nakaharanus nakaharae* (Matsumura) 指定状況 -

【形態】 体長(翅端まで) 5mm。体は全体黄褐色。複眼を含む頭部の幅は胸部の幅より狭い。
 【国内分布】 本州、四国、九州
 【主な生息環境】 個体数は非常に少ない。個体密度は極めて低い種である。埼玉県のほか栃木県、茨城県、長野県、岩手県、新潟県、和歌山県、愛媛県、奈良県そして福岡県から10数個体が確認されているにすぎない。広葉樹の林床に生息する。
 【県内での生息状況】 秩父市吉田の城峯山山頂(1983年8月;1983年10月)と奥武蔵山地の刈場坂峠(1985年10月)から数個体が確認されている。採集地は山地の広葉樹の林床で、周辺にスギやヒノキの植林地もある。森林伐採や造成などによる生息地の改変が危惧される。
 【特記事項】 自然環境の改変による生息環境の減少が心配され、近い将来絶滅の危険性が高いと考えられる。これまで情報不足として扱ってきたが、近年の生息確認ができていない。

科名 ヨコバイ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2015) NT
 (和名) **フクロクヨコバイ**
 (学名) *Glossocratus fukurokui* (Matsumura) 指定状況 -

【形態】 体長(翅端まで) オス8~9mm、メス14mm。頭部が前方に伸びた特異的な形態のヨコバイである。
 【国内分布】 本州、四国、九州
 【主な生息環境】 全国的に極めて個体数が少なく、ススキに生息する。生息地も限定されている。詳細な生態は不明であるが、5月から幼虫が見られ成虫は7月中旬から8月にかけて出現する。卵越冬と考えられている。
 【県内での生息状況】 国内で本種が確認されたところは極めて局所的に限られる中、埼玉県でも三芳町(上富)からオス・メス各1頭が確認されている。生息範囲は非常に狭い。
 【特記事項】 生息地周辺の環境開発があることなどから生息環境の植生変化に伴う危機要因が危惧される。絶滅の危険度が大きい。

科名 コオイムシ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2015) NT
 (和名) **コオイムシ**
 (学名) *Appasus japonicus* Vuillefroy 指定状況 -

【形態】 体長17~20mm。体は卵形~長円形でやや扁平となる。前脚は捕獲脚となり、腹端には伸縮自在の呼吸管をもつ。体色は淡黄褐色~淡褐色。
 【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
 【主な生息環境】 平野部から低山帯の水田や池沼などに生息する。近縁種オオコオイムシ *A. major* と比較すると、本種の方が水深が深く開放水面を有するような水域を好む傾向がある。
 【県内での生息状況】 かつては低地帯から低山帯まで広く分布していたと考えられるが、低地帯では久喜市(大熊, 1989)と越谷市(中川, 2015)の記録が知られるのみ。ただ、後者の記録は学校プールから発見された1頭の記録であり、その由来は不明。台地・丘陵帯から低山帯まで局地的ながら生息地があり、近年では秩父地方から数ヶ所の生息地が報告されている(岩田・岩田, 2008; 岩田, 2012; 岩田・岩田, 2016)。
 【特記事項】 過去の記録にはオオコオイムシとの誤同定によるものが散見される(荻部・高桑, 1994)。両種は体長や体色で識別することは難しく、外部形態を詳細に観察する必要がある。

科名	コオイムシ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	VU
〔和名〕	タガメ	指定状況			
〔学名〕	<i>Kirkaldyia deyrolli</i> (Vuillefroy)	-			
【形態】	体長48～65mm。メスはオスよりやや大型。超大型の水生半翅類で前脚は巨大な捕獲脚となる。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	抽水植物が豊富な止水域や緩流にみられる。エサとなる魚類や両生類が豊富に生息する良好な水域環境が必要。				
【県内での生息状況】	古くは横瀬町、熊谷市（旧妻沼町、旧江南町）、秩父市（旧吉田町）、日高市、飯能市から記録がある。2004年に加須市で2令幼虫が2頭採集されている（大熊, 2004）が、自然分布の個体かどうか不明。				
【特記事項】	県内ではほぼ絶滅に近い状態だが、本来の生息地ではないと思われる場所からの記録が散見される。近年では、本種や（オオ）コオイムシなどがペットショップなどで売られており、飼育個体の放逐に由来する可能性がある記録には注意が必要である。本種は47都道府県のRDBすべてに掲載されており、そのうち関東地方では東京都と神奈川県が絶滅としている。				

科名	ミズムシ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	NT
〔和名〕	ミヤケミズムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Xenocorixa vittipennis</i> (Horváth)	-			
【形態】	体長7.2～9.1mm。ミズムシ科の中ではやや大型の種で、体は丸味があり幅広く、強い光沢がある。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	水生植生が豊富な池沼に生息する。生息地では高密度で群生するが、関東地方ではその産地は局所的である。				
【県内での生息状況】	これまで北本市と上尾市から記録されていたが、近年、新たに越谷市から生息地が発見された。				
【特記事項】	ミゾナシミズムシ <i>Cymatia apparens</i> やコミズムシ類（ <i>Sigara</i> 属）とは明らかに大きさが異なることで区別できる。なお、東日本に分布するミズムシ科の最大種であるミズムシ <i>Hesperocorixa distantis</i> （体長9.5～11mm）は埼玉県からは記録がない。				

科名	コバンムシ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	EN
〔和名〕	コバンムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Ilyocoris exclamationis</i> (Scott)	-			
【形態】	体長11.3～12.8mm。体は小判形で、生時、前胸背と前翅の基部は光沢のある緑色である。単眼を欠き、口吻は前基節よりはるかに短い。前脚の腿節はきわめて太い。				
【国内分布】	本州、九州				
【主な生息環境】	ヒシなど水生植物が豊富な深い池沼に生息するが、現在では産地はきわめて限定されている。体表面に薄い空気層を作って呼吸する。				
【県内での生息状況】	これまでに北本市の池沼から記録がある（林・碓井, 1991; 新井, 2014）。近年の確実な記録はなく、絶滅が危惧される。				
【特記事項】	環境省（2015）によれば、国内の既知産地はここ10年間で半数以下になっている。近県ランク 東京：絶滅、栃木・千葉：絶滅危惧I類。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	-
〔和名〕	イネカメムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Niphe elongata</i> (Dallas)	-			
【形態】	体長 12～13mm。体は黄白色で暗褐色の点刻を散布する。前翅の革質部の外縁は黄白色である。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	イネ科植物を寄主とするカメムシで個体数は多くはないが、特にイネに大発生をして穂や茎に群がり吸害する。水田周囲のイネ科雑草で生活し、イネの出穂期になると水田に移動する。斑点米を引き起こす原因種である。低地を中心に生息環境をもつ。成虫越冬で4月頃から活動を始める。				
【県内での生息状況】	低地帯から台地帯にかけての古い記録はあるものの、防除が徹底されたことに起因するのか近年の記録は全くない。イネの害虫として注目されてきたが、県農業関係研究機関でも情報は得られていない。関東地域では茨城県南部の稲敷郡で多くの個体が水田から確認されている。				
【特記事項】	本種に似たシロヘリカメムシ <i>Aenaria lewisi</i> がいるが、前翅の外縁の黄白色帯はイネカメムシより顕著である。近県ランク 神奈川：情報不足、栃木：絶滅危惧Ⅱ類、千葉：要保護生物。				

科名	ゲンバイウンカ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2015)	VU
〔和名〕	ハウチワウンカ	指定状況			
〔学名〕	<i>Trypetimorpha japonica</i> Ishihara	-			
【形態】	翅端まで3～4mm。体は灰白色。前翅中央は黒色で周辺部に向かい放射状に黒い条紋がある。				
【国内分布】	本州、九州				
【主な生息環境】	本州以西から西日本に分布するが生息地は局地的である。埼玉県以外では栃木県、石川県、山口県から記録されている。成虫は8月から9月にかけて出現し、湿地に生える草原のイネ科植物特にチガヤに見られる。石川県では丘陵のアカマツ-コナラ帯の境界のイネ科植物からも確認されている。				
【県内での生息状況】	生息地は局地的であり、個体密度も極めて低い種である。県内では鳩山町奥田と赤沼のほか日高市日和田山で生息が確認されているにすぎない。最近の情報は得られていない。台地・丘陵帯を中心に生息していると考えられる。				
【特記事項】	ゲンバイウンカ科は県内から本種を含め6種が確認されているが、形状や色彩などから他種との区別は容易である。北限域にあたる栃木県では準絶滅危惧種としている。				

科名	ヨコバイ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	カワムラヨコバイ	指定状況			
〔学名〕	<i>Mimotettix kawamurae</i> Matsumura	-			
【形態】	体長（翅端まで）6mm。体は光沢のある赤褐色。前翅先端は黒色。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島（屋久島）				
【主な生息環境】	個体密度は低く生息確認も少ない。本州では東北から東海地方にかけて局地的に産地が確認されている。現在のところ秋田県が北限である。8月から9月にかけて出現し、アカシデ、クリ、ヤマザクラなどの落葉広葉樹とスギが混在する丘陵地が生息環境である。				
【県内での生息状況】	県内では久喜市青毛、鳩山町赤沼、日高市日和田山から生息が確認されている。低地帯から台地・丘陵帯からの記録である。全国的に見て県内から複数個体が記録されていることは特筆すべきことである。最近の情報は得られていない。				
【特記事項】	灯火にも飛来するが、詳細な生態は分かっていない。近県ランク 栃木：絶滅危惧Ⅱ類。				

科名	コガシラウンカ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	イブキコガシラウンカ	指定状況			
〔学名〕	<i>Errada ibukisana</i> Matsumura	-			
【形態】	翅端まで9～13mm。頭部は小さく、体は茶褐色であるが小楯板は鮮黄褐色。幅広く前翅が体を覆う。				
【国内分布】	本州				
【主な生息環境】	本州中部以西の山地に生息するが個体密度は低く珍しいウンカである。寄主植物はスギと言われるが、詳しい生態は分かっていない。				
【県内での生息状況】	県内ではこれまでに本庄市児玉、小鹿野町(両神山)、秩父市大滝(三峰山、入川)で確認されているにすぎず、最近の本種に関する情報は全く得られていない。今後、生息状況に注視が必要。				
【特記事項】	コガシラウンカ科には県内から本種を含め7種が知られている。体が幅広いことと大きいことで他種との区別は容易である。長翅型のほかに短翅型も現れることが知られている。				

科名	コオイムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	オオコオイムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Appasus major</i> (Esaki)	-			
【形態】	体長23～26mm。近縁種コオイムシ <i>A. japonicus</i> によく似るが、一般的には本種の方がやや大型とされる。体色は暗褐色～黒褐色だが、体長や体色は個体差が大きく、前種との同定には注意が必要。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	里山の谷地などのほか、高層湿原にもみられる。前種と比較すると、やや閉鎖的な水域に生息すると思われる。ときに開放水面がほとんどないような湿地的環境からも発見される。				
【県内での生息状況】	これまで秩父地方から2ヶ所の生息地が知られるのみで、いずれも湧水起源の冷涼な場所という(岩田・岩田, 2008)。				
【特記事項】	コオイムシ(CR)の項を参照。				

科名	ミズムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	NT
〔和名〕	ミゾナシミズムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Cymatia apparens</i> (Distant)	-			
【形態】	体長5.0～5.9mm。コミズムシ類(<i>Sigara</i> 属)に似るが頭部腹面(顔)は非常に短く、下唇の横条を欠く。前脚跗節の形状は雌雄とも細長い指状で、先端には顕著な爪がみられる。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	安定した止水域に生息するが、その密度は一般に低い。近年、個体数がさらに減少する傾向がある。生態については詳細は不明だが、捕食肉食性が強いといわれている。				
【県内での生息状況】	県内では大宮台地の北本市の記録がある(林・碓井, 1991)。冬季には、比企丘陵にある学校プールから得られた記録もあるという。同所的に見られるコミズムシ類(<i>Sigara</i> 属)に比べると個体数は非常に少ない。				
【特記事項】	近県ランク 栃木：準絶滅危惧種。				

科名	ナベブタムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	ナベブタムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Aphelocheirus vittatus</i> Matsumura	-			
【形態】	体長8.5～10.0mm。体はほぼ円形で、扁平。単眼を欠き、口吻は前基節より長い。体背面には黄褐色と暗褐色の斑紋があるが、暗色部の広さには変異がある。短翅型で、ごく稀に長翅型が出現する。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	体表面に薄い空気層を作って呼吸し、一生水中で生活する。清流中に棲み、砂礫の多い水底に浅く潜る。				
【県内での生息状況】	主に比企丘陵以西の低山帯を流れる河川から見いだされる。荒川水系では寄居町が生息域の最下流部となる。				
【特記事項】	生息環境の要因として、水質や流速のほかに河床が砂礫質であることも重要と考えられる。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	マルミズムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	ヒメマルミズムシ				
〔学名〕	<i>Paraplea indistinguenda</i> (Matsumura)	指定状況	-		
【形態】	体長 1.5 ~ 1.7mm。体はやや角張った楕円形で、頭部は幅広く、前胸背とほぼ同幅である。淡褐色~黄褐色で、頭頂から顔面にかけての中央部は線状に隆起する。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	主として、池、水田などの止水域に生息し、マツモムシのように背泳する。				
【県内での生息状況】	これまで低山帯の秩父市と横瀬町から記録があり、次種マルミズムシ <i>P. japonica</i> との混生地も知られているが(岩田, 2014; 岩田・岩田, 2016)、いずれも小規模な池沼で、安定的な生息地とは言い難い。				
【特記事項】	次種マルミズムシに比べて一回り小型の種であるが、同定は体長だけで判断せず、頭部の形状を詳細に観察することが望ましい。				

科名	マルミズムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	マルミズムシ				
〔学名〕	<i>Paraplea japonica</i> (Horváth)	指定状況	-		
【形態】	体長 2.3 ~ 2.6mm。頭部には縦隆起はないが、その部分がときに暗色となる。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	前種ヒメマルミズムシ <i>P. indistinguenda</i> と同様、水草が多く浅い所を好み、背を下にして泳ぐ。池沼、水田、用水池などの開放的な止水域に生息する。				
【県内での生息状況】	これまで秩父市と横瀬町から記録があり、前種との混生地も知られている(岩田, 2014; 岩田・岩田, 2016)。長瀨町でも記録されている(神田・井上, 2016)。				
【特記事項】	前種の項を参照。				

科名	サシガメ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	ビロウドサシガメ				
〔学名〕	<i>Ectrychotes andreae</i> (Thunberg)	指定状況	-		
【形態】	体長 11 ~ 14mm。頭部と胸部は光沢のある藍青色、腹部の側縁は朱赤色。触角は長毛におおわれる。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	雑草間や石下、落葉下、雑草植物の根際などで生活をし、ヤスデなどの小動物や他の昆虫を捕食する地表性サシガメ。個体密度は低い。成虫で越冬する。				
【県内での生息状況】	県内の生息地はこれまで東松山市、小川町、嵐山町、毛呂山町の比企地方の丘陵帯に限られていたが、最近の調査で桶川市、鶴ヶ島市、川越市、越生町からも生息が確認されている。飯能市(2009年6月)の記録が最も新しいものである。県西部地域を中心に生息分布が見られる。				
【特記事項】	これまで絶滅危惧 I A として扱ってきたが、生息地が限定されるものの複数の生息地が確認されたことからランク変更した。				

科名	サシガメ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	キイロサシガメ				
〔学名〕	<i>Sirthena flavipes</i> (Stål)	指定状況	-		
【形態】	体長 18 ~ 20mm。頭部は前方に突出する。黒色の胸部背面と前翅を除き体は褐色を帯びた黄色。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	水田近くの雑草間や休耕田など湿気の多い地表で生活し、口器は発達して他の小昆虫などを捕食する。夜間灯火にも飛来する。山地には生息せず低地帯から丘陵帯に生息することが知られる地表性サシガメである。				
【県内での生息状況】	県内では旧騎西町(現加須市)、久喜市、杉戸町、さいたま市、日高市から生息が確認されていたが、新たに三郷市(2012年)と寄居町(2015年)から確認された。寄居町の記録は駅構内の照明に飛来した個体である。				
【特記事項】	個体密度が低く確認が散見されることから、今回新たにレッドリスト掲載種とした。今後の生息状況に注視が必要。				

科名	クヌギカメムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	ヨツモンカメムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Urochela quadrinata</i> (Reuter)	-			
【形態】	体長13～16mm。体は赤褐色で前翅革質部に左右2個の黒色紋があり、背中は密な黒色点刻で覆われる。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地性のカメムシ。ハシバミ、オヒョウ、ハルニレ、ケヤキなどのニレ科植物の樹上で生活する。樹皮下や山地の暖房の効いた建物に侵入し集団で成虫越冬する。新成虫は8月から9月に現れる。クヌギカメムシ科の中では個体密度は低い種で生息環境は限られている。				
【県内での生息状況】	県内の既産地は秩父地方に限定されている。生息環境は山地帯である。これまで秩父市大滝（落合、二瀬、入川溪谷、中津川、大陽寺）のほか秩父市荒川（熊倉山）のみから知られているにすぎない。山地に寄主植物は確保され、生息環境は維持できているが個体数の少ない種である。				
【特記事項】	同属のナシカメムシ <i>U. luteovaria</i> は、低山地から山地帯のサクラの樹幹でみられるが県内では秩父地方に限られた生息場所があり、同様に個体数は少ない。				

科名	セミ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	アカエゾゼミ	指定状況			
〔学名〕	<i>Auritibicen flammatus</i> (Distant)	-			
【形態】	体長40～43mm、翅端まで60～68mm。体も前翅ともに赤褐色がかかる。オスの腹弁は第3腹節に達しない。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地性のエゾゼミ。落葉広葉樹林の溪谷に棲み樹上の梢のほか林縁の草上でも鳴くことがある。関東地方には本種のほかエゾゼミ属はエゾゼミ <i>A. japonicus</i> とコエゾゼミ <i>A. bihamatus</i> が知られるが鳴き声による区別は容易ではない。				
【県内での生息状況】	山地帯から亜高山帯にかけて分布する山地性のセミで、ギー・・・と連続して鳴く。県内では奥武蔵（飯盛峠、堂平山）、秩父市（定峰峠、三峰山、入川谷、小倉沢、中津川）、皆野町（城峯山）など限られた地域の記録となっている。個体密度は低いものの、生息環境は維持されている。				
【特記事項】	最近になってエゾゼミ属の学名は変更されたので注意を要する。近県ランク 群馬：情報不足、栃木・長野：準絶滅危惧、茨城：危急種。				

科名	セミ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	ハルゼミ	指定状況			
〔学名〕	<i>Terpnosia vacua</i> (Olivier)	-			
【形態】	体長25～30mm、翅端まで30～35mm。体は褐色で黄白色の微毛でおおわれる。翅は無色で透明。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	4月から6月上旬にかけて松林にすみ、アカマツ林の分布と一致していると言われる。日本産セミ科の中では最も早く出現する。合唱性があるが樹上の梢にいて肉眼での確認は難しい。松林の外に出ることはなく局所的に発生する。				
【県内での生息状況】	県内では台地帯から低山帯に生息している。特に、秩父地域とその周辺部の低山帯におけるヤマツツジーアカマツ群落がハルゼミの分布域となっている。以前は県南部をはじめとし低地帯を含めた全県的な分布がみられたが、アカマツ林の枯死、宅地開発の影響で生息場所が激減し個体密度も著しく低下しているため低地帯での生息は期待できない。最近では長瀨町（2016年5月）の記録がある。				
【特記事項】	晴れた日にムゼームゼーと鳴く。全国的に個体数が減少しているセミであり、環境指標生物としても重要な種と言える。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	セミ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	チッチゼミ	指定状況			
〔学名〕	<i>Kosemia radiator</i> (Uhler)	-			
【形態】	体長18～23mm、翅端まで27～32mm。小形のセミ。発音に関わる背弁がなく静止の時後翅が露出する。				
【国内分布】	北海道(恵山)、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	7月から10月中旬まで出現。秋のセミとも言える。山間部では発生が早い。マツ、スギなど針葉樹林に生息し特にアカマツ林の林床に生えるツツジに産卵するという。羽化も夕方から夜間だけではなく日中の明るい時間帯に行われることが知られている。				
【県内での生息状況】	県内では台地・丘陵帯から山地帯にかけて広く分布しているが、個体密度は高くない。奥武蔵山地、日高市(日和田山)、越生町、旧吉田町(現秩父市)、皆野町(美の山)、秩父市大滝(栃本、入川、三峰山)などから確認されている。				
【特記事項】	マツ林でチッチッチ・と鳴く。日本産のセミの中では特異的な形態をもつことからチッチゼミ亜科として他のセミ類と所属を異にする。沖縄産のセミを除くと日本最小のセミ。近県ランク 栃木：準絶滅種、長野：留意種、神奈川・群馬：情報不足。東京都でも多摩地方の生息が危惧されている。				

科名	トゲアワフキムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	タケウチトゲアワフキ	指定状況			
〔学名〕	<i>Machaerota takeuchii</i> Kato	-			
【形態】	体長(翅端まで)8mm。体は黒色で頭部は小さく、小楯板の長大なとげが後方の翅端まで伸びる。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地にすむ特異的な形態をしたアワフキムシである。生態も独特で、幼虫は山地に生える落葉高木のシナノキやヘラノキの枝に石灰質の筒状の巣をつくり生活する。成虫も寄主植物を中心に生活する。集団で生活することが多い。				
【県内での生息状況】	県内では秩父市久那、秩父市大滝(栃本、矢竹沢)の秩父山地に限られて生息が確認されている。生息場所は寄主植物を中心とした植物上である。さいたま市内の公園では、シナノキ科樹木の植栽による随伴移入の個体群の発生記録がある(植村, 2012)。				
【特記事項】	寄主植物の存在が本種の生息を安定的に保つ。同じトゲアワフキムシ科のムネアカアワフキ <i>Hinodoloides bipunctata</i> は、サクラなどの枝に石灰質の巣をつくることで知られ丘陵から山地帯にかけて広く見られるが、本種の生息密度は極めて低い。近県ランク 栃木：準絶滅危惧。				

科名	ウンカ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	クロスジオウンカ	指定状況			
〔学名〕	<i>Euides basilinea</i> (Germar)	-			
【形態】	体長(翅端まで)5.5～7mm。全体淡褐色で前翅基部と先端に太い黒色の帯がある。				
【国内分布】	北海道、本州、九州				
【主な生息環境】	湿地や河川敷に生息し、7月に出現する。寄主植物はヨシである。生息環境の保たれた場所によって個体密度は必ずしも低くないようである。灯火にも集まる習性をもつ。				
【県内での生息状況】	県内では加須市、久喜市、八潮市、さいたま市、羽生市、東松山市、鳩山町など低地帯から台地・丘陵帯にかけて生息が確認されている。県内北部地域からは確認はない。標高の低い湿地環境のヨシ群落の植生と密接な関係があることが伺える。				
【特記事項】	形態的に他種との区別は容易であり、湿地のヨシ群落の確保が本種の生息を安定的に保つことにつながる。近県ランク 栃木：絶滅危惧種。				

科名	ハネナガウンカ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	アヤヘリハネナガウンカ	指定状況			
(学名)	<i>Losbanosia hibarensis</i> (Matsumura)	-			
【形態】	体長5mm、翅端まで13mm。体は黄褐色、前翅は長大で赤褐色の帯条紋と後縁が波状の美しい種。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島（奄美大島）				
【主な生息環境】	生息地は局地的であり個体数は少ない。林縁の落葉樹の葉裏、雑木林の下草や林道沿いの草むらなどで確認されている。詳しい生態は不明であるが、モクセイ科のアオダモやマルバアオダモが寄主植物として知られる。灯火に飛来する習性も見られる。				
【県内での生息状況】	台地・丘陵帯から山地にかけて生息域をもつが個体密度は低い。県内では嵐山町、日高市、三芳町、毛呂山町、鳩山町、飯能市、奥武蔵山地、寄居町、本庄市、皆野町、秩父市大滝からの生息が知られている。新しい記録として寄居町（円良田湖）でも2016年8月に得られている。				
【特記事項】	生息環境は確保されていて寄主植物も広く分布している。個体数は少ないながら今後も確認例が増えることが推測される。近県ランク 栃木：準絶滅危惧種。				

科名	ハネナガウンカ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	シリアカハネナガウンカ	指定状況			
(学名)	<i>Zoraida horishana</i> Matsumura	-			
【形態】	体長6mm、翅端まで14mm。頭部は黄色、体は淡黄褐色で腹端は鮮紅色。前翅は長く前縁は黒紫色。				
【国内分布】	本州、九州				
【主な生息環境】	成虫は8月から9月に出現する。平地から丘陵にかけての雑木林内や林縁部の植物の葉裏にみられる。詳しい生態は未知であるが、幼虫は梅の古木や朽ち木に生えるキノコに生活することが知られている。灯火にも飛来することがある。				
【県内での生息状況】	県内では台地・丘陵帯から低山帯での記録がある。これまで神川町渡瀬、鳩山町奥田、飯能市多峯山から知られていたが、新たに飯能市（天覧山、岩淵）、長瀨町（宝登山）から確認された。個体密度は低く珍しい種である。				
【特記事項】	生息環境は維持されてはいるものの前種アヤヘリハネナガウンカ <i>Losbanosia hibarensis</i> に比べ生息範囲も狭く個体数は少ない。近県ランク 栃木：情報不足。				

科名	ハネナガウンカ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	キスジハネビロウンカ	指定状況			
(学名)	<i>Rhotana satsumana</i> Matsumura	-			
【形態】	体長3～35mm、翅端まで7mm。前翅の幅が広く外縁に沿って黄褐色の顕著な帯がある美しい種。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地に生息するが寄主植物など詳しい生態は不明である。成虫は7月から10月にかけて現れる。林縁の植物に見ることもあるが、個体密度は低い。植物体に静止する個体よりむしろ灯火に飛来した本種の観察例の方が多い。				
【県内での生息状況】	県内では台地・丘陵帯から山地にかけて生息が確認されている。久喜市、鳩山町、小川町、日高市、寄居町、越生町、奥武蔵山地、秩父市大滝などが既産地として知られる。生息環境は安定的に確保されている状況と考えられる。				
【特記事項】	県内からハネビロウンカ亜科に属する数種が知られているが前翅の形態から同定は容易である。				

科名	テングスケバ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	クロテングスケバ	指定状況			
(学名)	<i>Saigona ussuriensis</i> (Lethierry)	-			
【形態】	体長(翅端まで)11mm。体は暗褐色で頭部から小楯板にかけて縦に黄白色のすじがある。				
【国内分布】	北海道、本州				
【主な生息環境】	本州中部以北に生息。生息地は山地に限られている。落葉広葉樹林の林縁部の草地に生活し草本植物を寄主としているようであるが詳細な生態は不明。個体密度は低い種である。				
【県内での生息状況】	山地の落葉樹林の林縁や林道沿いの草地が生息場所。県内では皆野町、秩父市（浦山、武甲山、中津川林道、三国峠）の秩父山地が既産地である。低山地帯から亜高山帯にかけて生息している。生息環境は確保されていると考えられるが、最近の生息情報は全く得られていない。				
【特記事項】	県内からテングスケバ科は5種が知られるが区別は容易である。近県ランク 栃木：準絶滅危惧種。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	アリヅカウナカ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	アリヅカウナカ				
〔学名〕	<i>Tettigometra bipunctata</i> Matsumura	指定状況			-
【形態】	体長(翅端まで)5mm。体は灰褐色で暗褐色と赤色の斑点が散在する。体の両側縁はほぼ平行。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	平地から山地の草本植物の生える場所に生息と言われる。河川敷や林縁の下草などからも観察されている。産地は極めて局地的で個体密度も低い。ヨーロッパ産の種ではアリとの共生が明らかになっているが日本産の詳しい生態は未知。				
【県内での生息状況】	秋に採集されたほかワラ卷トラップでも成虫が得られていることから成虫越冬すると考えられる。県内では秩父市(大滝、吉田、定峰峠)、皆野町、小鹿野町、日高市、横瀬町、三芳町、毛呂山町、小川町、越生町、東松山市などから記録されている。				
【特記事項】	近県ランク 栃木：準絶滅危惧種。				

科名	ミズカメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	ムモンミズカメムシ				
〔学名〕	<i>Mesovelvia miyamotoi</i> Kerzhner	指定状況			-
【形態】	体長はオス2.7~2.9mm、メス3.0~3.4mm。無翅型ときに長翅型。単眼は長翅型では2個あるが、無翅型では欠く。長翅型では、中胸背の小楯板は横長で幅広くなり、その後方に後胸背の隆起部がみられる。体背面は緑色~緑褐色で光沢がある。胸背と腹部背面は平坦となる。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	ヒシ、スイレン、ヒツジグサなどの浮葉植物が多い池沼に生息する。				
【県内での生息状況】	大宮台地から低山帯にかけて記録があるが、産地はやや局地的。近縁のヘリグロミズカメムシ <i>M. thermalis</i> は本種より分布が広く低地帯にも生息し、比企丘陵では両種が同所的に見られる池沼も知られる。				
【特記事項】	上記の2種は微小で形態的にも類似するため、同定には細心の注意が必要である。				

科名	カタビロアメンボ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	マダラケシカタビロアメンボ				
〔学名〕	<i>Microvelia reticulata</i> (Burmeister)	指定状況			-
【形態】	体長1.1~1.6mm。楕円形の微小種で、アメンボを小さく、脚を短くしたような形である。頭頂中央には明瞭な縦溝がある。無翅型ときに長翅型。無翅型では中胸背が顕著に認められる。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	冷涼地の池沼にみられ、水際付近の狭い水面で生活する。				
【県内での生息状況】	大宮台地から低山帯にかけて記録があるが、生息が確認されている池沼は少ない。				
【特記事項】	県内では、近縁の別種が同所的に見られる池沼もあり、同定には細心の注意が必要である。				

科名	アメンボ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	NT
〔和名〕	ババアメンボ				
〔学名〕	<i>Gerris babai</i> Miyamoto	指定状況			-
【形態】	体長6.3~9.1mm。小型で、体は黒色。前脚腿節は大部分が黒色となる。オス腹部の第7腹板から第8腹板にかけての中央は幅広く凹み、第7腹板の後縁中央部はU字状に湾入する。短翅型(微翅型)および長翅型。				
【国内分布】	北海道、本州、九州				
【主な生息環境】	抽水植物群落が発達した池沼に生息し、抽水植物群落と開放水面の境界付近を好む。				
【県内での生息状況】	東部低地から低山帯にかけて広い範囲から記録されているが、分布は局地的。岸辺に抽水植物が繁茂する池沼に限って生息する。近縁のヒメアメンボ <i>G. latibdominis</i> も同所的に見られる場合が多いが、秋季にはヒメアメンボが早い時期に越冬のために没姿するのに対し、本種は11月くらいまで水面に姿を見せている。				
【特記事項】	長翅型はヒメアメンボと形態が似ているため、同定には腹端部の形状などを精査する必要がある。近県ランク 茨城・神奈川：絶滅危惧Ⅰ類、群馬：絶滅危惧Ⅱ類、栃木：準絶滅危惧、東京：情報不足。				

科名	ミズギワカメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	モンシロミズギワカメムシ	指定状況			
(学名)	<i>Chartoscirta elegantula longicornis</i> (Jakovlev)	-			
【形態】	体長はオス 3.0～3.8mm、メス 3.2～3.9mm。体は比較的細長く、光沢の強い黒色地に白色の紋がある。体表は黒色の長毛で覆われる。触角の第1節先端部と第4節は黄白色。前胸背は細長く、側縁は弓状に湾入し、前葉と後葉は横溝によってはっきり分かれる。長翅型(亜長翅型)のみ。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	湿地の雑草間の地表に生息する。動きは活発で、歩行、跳躍、飛翔を素早く行なう。				
【県内での生息状況】	寄居町や日高市、鳩山町、秩父市、横瀬町などから記録があるが、低地帯からは見つかっていない。比較的明るい湿地環境を好み、分布は局地的である。				
【特記事項】	近県ランク 栃木：準絶滅危惧種。				

科名	サシガメ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	トゲサシガメ	指定状況			
(学名)	<i>Polididus armatissimus</i> Stål	-			
【形態】	体長 10mm。淡褐色で頭部、胸部、腹部側縁(結合板)、各肢に長く鋭い棘を多数もつ。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	湿地や休耕田、河川敷の植物の根際を中心に生活し、植物の地上部に姿を見せることは少ない。特にイネ科植物の生えている場所にみられる。他の小昆虫を捕食する。動作は緩慢である。				
【県内での生息状況】	低地から低山帯にかけて分布していることが明らかになっている。個体密度は高くはないものの、これまで久喜市、日高市、嵐山町、川越市、東松山市、寄居町、秩父市、本庄市から生息が確認されている。最近では三郷市(2013年9月)の記録がある。				
【特記事項】	乾燥した環境には生活せずやや湿った水環境に依存し生息する。植物根際の枯れ草に馴染んだ体色をしていることが多い。				

科名	ヘリカメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	ヒメトゲヘリカメムシ	指定状況			
(学名)	<i>Coriomeris scabricornis</i> (Panzer)	-			
【形態】	体長 8～9mm。体は灰褐色で胸部の側縁に 10 個前後の顆粒状突起、後脚腿節に 4 本前後の棘がある。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	国内では海岸から山地まで生息範囲は広い。比較的乾燥した草原の地表や雑草間の根際などの環境を好む習性がある。分布範囲は広いが個体密度は決して高くなく、ヘリカメムシ科の中でも採集例は少ないと種と言える。				
【県内での生息状況】	平地から山地帯にかけての地表や雑草間根際に生息環境をもつ。県内ではこれまで久喜市、羽生市、本庄市、寄居町、小川町、東松山市、長瀨町から生息が確認されている。同一場所でまとまって複数個体が採集されることはほとんどない。長瀨町(2015年10月)の記録が最近のものである。				
【特記事項】	これまで古い資料では和名をヒメヘリカメムシとして扱ってきたので注意を要する。近県ランク 栃木：準絶滅危惧種。				

科名	ヘリカメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	アズキヘリカメムシ	指定状況			
(学名)	<i>Homoeocerus marginiventris</i> Dohrn	-			
【形態】	体長 13～16mm。体は細長く黄褐色で小点刻を密にもつ。触角第1節が太い。腹部結合板に黒小紋。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	ダイズやアズキなどマメ科作物の害虫として知られているが被害は少ない。農耕地や周辺の草原などに生息する。寄主植物上にいることが多く、明るく開けた場所で飛翔する。				
【県内での生息状況】	県内では寄居町、東松山市、日高市、長瀨町、皆野町、鶴ヶ島市、嵐山町など台地・丘陵帯から低山帯にかけて生息が確認されている。個体密度は低いものの生息環境は保たれていると言える。マメ科作物の害虫として知られているが被害を生じるほどではない。				
【特記事項】	近県ランク 神奈川：情報不足、栃木：絶滅危惧Ⅱ類、千葉：要保護生物。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	イシハラカメムシ				
〔学名〕	<i>Chalazonotum ishiharai</i> (Linnavuori)	指定状況	-		
【形態】	体長9～11mm。体は長形の黄緑がかった褐色で小さな黒色点刻を散布する。腹面は黄色。				
【国内分布】	本州、四国				
【主な生息環境】	山地の谷間の川沿いや林縁に生育するミツバウツギ(ミツバウツギ科)を寄主植物とし、幼虫・成虫ともに実を吸汁する。7月から8月に産卵し、若齢幼虫はミツバウツギのさく果の中に入って生活する。				
【県内での生息状況】	県内の既産地は寄居町、皆野町、長瀬町、秩父市(定峰、吉田)であり台地・丘陵帯から山地帯にかけて生息する。寄主植物であるミツバウツギは広く分布しているが、稀なカメムシで個体密度は極めて低い。最近の県内における確認例はない。				
【特記事項】	樹皮下などで成虫越冬することが知られ、秩父地方でも越冬成虫が確認されている。近県ランク 茨城：絶滅危惧ⅠA類。				

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	ズグロシラホシカメムシ				
〔学名〕	<i>Eysarcoris gibbosus</i> Jakovlev	指定状況	-		
【形態】	体長5.5～6mm。淡褐色に黒紫色の点刻をもち、小楯板基部の三角形紋は黒紫色で赤銅色の光沢がある。				
【国内分布】	北海道、本州				
【主な生息環境】	本州では関東以北に生息し、北日本ではシソ科植物を寄主植物としている。 <i>Eysarcoris</i> 属では寒地系の種である。生息地でも個体密度は低い種であるが寄主植物上で複数個体を確認することもある。山地の農耕地も含め草本植物に依存し生息する。				
【県内での生息状況】	県内ではナス科植物からも確認している。低山帯から山地帯に生息する。県内から確認されている本属6種の中では個体数は最も少ない。これまで秩父市(大滝、吉田町)、横瀬町、皆野町、寄居町、小川町から確認されている。生息環境は安定的に保たれていると考えられる。				
【特記事項】	本属の中では、背中の中白紋が小さく目立たないことや小楯板が黒紫の色彩をしていることで他種との区別は容易である。近隣都県のRDBでレッドリスト種としているところはないが、埼玉県では南限域の種として生息状況を注視していく必要がある。				

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	タマカメムシ				
〔学名〕	<i>Se Pontiella aenea</i> (Distant)	指定状況	-		
【形態】	体長3～4mm。日本産カメムシ科の中で最小種。光沢のある黒色の地に不規則な淡色紋をもつ。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	雑木林のヤエムグラ(アカネ科)やオドリコソウ類(シソ科)の群落に棲み、幼虫はヤエムグラの種子で育つと言われる。個体密度は低い。成虫で越冬し5月に姿を見せる。新成虫は7月に現れるが出現期は短い。局所的に発生し、発生地ではまとまった個体を確認することがある。				
【県内での生息状況】	県内では主に低山帯から山地帯に分布する。これまで北本市、川口市、三芳町、飯能市、旧都幾川村(現ときがわ町)、毛呂山町、皆野町、本庄市、秩父市などで記録がある。しばらく確認されていなかったが、2002年5月に越生町から記録された。				
【特記事項】	寄主植物の生育状況は保たれている。県西部・北部においてさらに生息地確認の可能性が考えられる。今後、寄主植物の生育段階と本種の発生時期に留意し、本種の生息状況を注視する必要があるため、新たにレッドリスト種とした。				

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	シモフリクチブトカメムシ	指定状況			
(学名)	<i>Eocanthecona japonicola</i> (Esaki et Ishihara)	-			
【形態】	体長11～17mm。淡褐色に黒の斑紋がある。銅色の光沢をもつ。前胸背両端の側角は棘状にならない。				
【国内分布】	本州、四国、九州 日本固有種				
【主な生息環境】	山地に見られる。低木や草本性植物に生活し、鱗翅類の幼虫を捕食し体液を吸収する。葉裏などで口吻の先に捕食した幼虫をぶら下げていることが多い。個体密度は低い。				
【県内での生息状況】	県内には8種のクチブトカメムシ亜科の種が知られるがいずれも個体数は少ない。本種は低山帯から亜高山帯にかけて生息している。小川町、秩父市（定峰峠、大滝、浦山）、皆野町、小鹿野町など限られ地域からの記録に留まっている。林縁の低木や草に依存した生活環境をもつ捕食者である。				
【特記事項】	アカアシクチブトカメムシ <i>Pinthaeus scanguinipes</i> に形態はよく似ているが、頭部先端両側の側葉は中葉と接していないことで区別は容易である。近県ランク 栃木：要注意種。				

科名	ツノカメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	フトハサミツノカメムシ	指定状況			
(学名)	<i>Acanthosoma crassicaudum</i> (Jakovlev)	-			
【形態】	体長17～18mm。体は光沢のある鮮緑色でオスの腹部先端の生殖節のハサミは太く短い。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地に生息しイヌザクラ、ソメイヨシノなどのバラ科植物のほかミズキからも確認されているが、イヌザクラが寄主として知られる。成虫越冬するが秋季に確認される例も少ない。樹上生活をする。				
【県内での生息状況】	ツノカメムシの中でも個体密度の低い山地性の種である。県内では秩父市（定峰峠、浦山、武甲山、大滝）、皆野町（城峯山）のほか新座市からの記録もある。低山帯から亜高山帯にかけて生息する。長瀨町（2016年9月）の記録が最新のものである。				
【特記事項】	ツノカメムシ科の仲間、オスでは生殖節のハサミ状突起の形態で区別がつきやすいが、メスはよく似ているため分類が容易ではないことが多い。本種のメスは前胸背側縁に歯状突起があることで他種との区別は比較的容易である。近県ランク 栃木：要注意種。				

科名	ツノカメムシ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
(和名)	ツノアカツノカメムシ	指定状況			
(学名)	<i>Acanthosoma haemorrhoidale</i> (Linnaeus)	-			
【形態】	体長15～18mm。鮮やかな緑色で前翅の基部半分と前胸背後縁が赤色。側角も顕著に外方に突出する。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地性の個体密度の少ない種であるが、北海道には決して少ないツノカメムシである。寄主植物としてバラ科植物のズミ、イヌザクラ、ナナカマドのほかアズキナシにもよく見られる。寄主植物の樹上で生活するため目につくことは少ない。成虫で越冬する。				
【県内での生息状況】	ツノカメムシの中でも個体密度の低い山地性の種である。県内ではときがわ町（堂平山）、秩父市（大滝、定峰峠、三峰山）から生息が確認されている。低山帯から亜高山帯にかけて生息する。寄主植物は安定的に保たれている。秩父市大滝（2010年10月）の記録が最新のものである。				
【特記事項】	近縁のミヤマツノカメムシ <i>A. spinicolle</i> は、前胸背の側角が弱く体が細長いことなどで区別できる。樹上に生活し秋季に発見されることが多い。近県ランク 栃木：情報不足種。				

科名	アメンボ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
(和名)	オオアメンボ	指定状況			
(学名)	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)	-			
【形態】	体長19～27mm。アメンボ科では日本最大の種。体背面は光沢のない黒色～黒褐色で、側面には銀灰色の軟毛が帯状に密生する。オスでは、特に長い中脚が顕著。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	池沼などの止水域や河川の緩流に生息し、日陰となる水面を好む。				
【県内での生息状況】	大宮台地から低山帯にかけて広く分布するが低標高地の生息地は少ない。近年では標高が10mほどの三芳町竹間沢からも発見されている（碓井，2014）。				
【特記事項】	生息環境として、直射日光が当たらないような木陰の水面の存在が重要である。岸辺の樹木の伐採で水面が一様に明るくなったことが原因で消失したと考えられる生息地が複数ある。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	アメンボ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	NT
〔和名〕	エサキアメンボ				
〔学名〕	<i>Limnoporus esakii</i> (Miyamoto)	指定状況	-		
【形態】	体長はオス7.9～8.5mm、メス9.1～10.5mm。小型の繊細で美しいアメンボで、体は暗赤褐色～褐色であり、体側は銀白色の毛による縦帯がある。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	ヨシなどの抽水植物群落内のやや暗い水面で生活し、早春や晩秋以外は開放水面ではみられない。				
【県内での生息状況】	かつては東部低地から大宮台地までの荒川以東の低標高地に限って生息する種と考えられていたが、近年では比企丘陵や秩父地方からも発見されている。標高190mの秩父市下影森の生息地(岩田・岩田, 2010)は、県内の既知産地としては遠く隔たつて西部に位置する。				
【特記事項】	県内に生息するアメンボ科9種の中では、もっとも生息環境の変化に弱い種と考えられる。				

科名	マキバサシガメ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
〔和名〕	ベニモンマキバサシガメ				
〔学名〕	<i>Gorpis japonicus</i> Kerzhner	指定状況	-		
【形態】	体長12～13mm。体は淡黄褐色で前翅の中央と先端に朱紅色の斑紋をもつ美しい種。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山間部に生えるクルミやキリなどが生息樹木として知られるが、林縁や林床の植物にも生息する。葉裏にすることが多く、同じ生息環境に棲む他の小昆虫を捕食して生活している。丘陵から山地にかけて生息域は広い。				
【県内での生息状況】	県内では過去に県南部のさいたま市(秋ヶ瀬)の記録があるものの、小川町、本庄市、寄居町、奥武蔵(刈場坂峠)、城峯山、皆野町、長瀨町、秩父市(大滝)など、多くは県西部や県北部の丘陵から山地にかけて生息が確認されている。個体密度は高くはないが、生息環境は維持されている。				
【特記事項】	同属のアカマキバサシガメ <i>G. brevilineatus</i> はよく似ているが、赤褐色で長毛があることで区別は容易である。近県ランク 栃木県：準絶滅種、千葉：消息不明、茨城：希少種。				

科名	サシガメ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
〔和名〕	アカヘリサシガメ				
〔学名〕	<i>Rhynocoris rubromarginatus</i> (Jakovlev)	指定状況	-		
【形態】	体長12～14mm。体は黒色で胸部側縁と後縁、腹部の側縁は朱紅色。頭部は長く背中に長毛をもつ。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	山地林縁の草本植物や低木上に生息する。昼間に活動しハムシなど他の小昆虫を捕食する。動きは機敏でよく飛翔する。				
【県内での生息状況】	台地・丘陵帯から山地帯にかけて生息しているが、個体数は減少傾向にある。県内ではこれまでに秩父市大滝(二瀬、霧藻ヶ峰、中津川)、秩父市白久、小鹿野町(志賀坂峠)、飯能市(落合、多峯主山)、寄居町、横瀬町などから生息が確認されている。				
【特記事項】	県内では生息環境は維持されてはいるものの近年個体数が減少しており、今後の生息状況に注視が必要なことから今回掲載種として加えたものである。近県ランク 神奈川：情報不足、千葉：不明種。				

科名	ツチカメムシ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	NT
〔和名〕	シロヘリツチカメムシ				
〔学名〕	<i>Canthophorus niveimarginatus</i> Scott	指定状況	-		
【形態】	体長6～8mm。体は黒藍色で光沢が強い。体の側縁は細く黄白色で縁どられる。各脛節に棘をもつ。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	ススキやチガヤ群落において、ススキをはじめ他の植物の根に半寄生するビャクダン科カナビキソウに生息する。カナビキソウは畑や水田、山野の日当たりの良いところが生育場所である。				
【県内での生息状況】	寄主植物の生育する地表近くで生活し、果実を吸汁する。県内では、本庄市、熊谷市、寄居町、長瀨町、皆野町のほか戸田市、羽生市などで生息が確認されている。				
【特記事項】	6月頃に産卵した雌成虫は卵塊のそばから離れずに卵を守る保護習性がある。同じホシツチカメムシ亜科 <i>Sehirinae</i> に属するミツボシツチカメムシ <i>Adomerus triguttulus</i> とフタボシツチカメムシ <i>A. rotundus</i> に似るが、背中に白い紋がないことで区別できる。近県ランク 栃木・群馬：情報不足 (DD)。				

科名	キンカメムシ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
〔和名〕	チャイロカメムシ				
〔学名〕	<i>Eurygaster testudinaria</i> (Geoffroy)	指定状況	-		
【形態】	体長 8.5 ~ 11mm。体は茶褐色でキンカメムシ特有の派手な色彩ではない。体も平たく特異的な種。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	やや湿ったところに生えるカモジグサやチカラシバなどのイネ科植物の特に穂に多い。キンカメムシ科の中では珍しく草本性植物を寄主とする種である。成虫越冬で5月頃から越冬成虫は姿を現すが新成虫は7月になって発生する。個体密度は低い。				
【県内での生息状況】	県内では台地・丘陵帯から山地帯にかけて確認されている。夏から秋はカモジグサ、チカラシバ、ススキなどイネ科の植物上で確認される。これまでの既産地は長瀨町、秩父市、毛呂山町、深谷市、熊谷市、東松山市である。飯能市(2009年6月)が最も新しい記録である。				
【特記事項】	河川敷や湿地のあるイネ科植物群落が生息地である。日本産本属は本種のみでチャイロカメムシ亜科に属する。一見して他種との区別は容易である。				

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
〔和名〕	イネクロカメムシ				
〔学名〕	<i>Scotinophara lurida</i> (Burmeister)	指定状況	-		
【形態】	体長 8 ~ 10mm。体は黒色で光沢はなく頭部側葉と中葉は同長。前胸背前縁の棘状突起は側方に短い。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	イネの害虫、クロカメムシとして知られてきた種。イネをはじめサトウキビ、マコモ、ヨシなど湿った環境に生えるイネ科植物に生息する。初夏に発生する。雑草間や根際、浅い地中で成虫越冬する。				
【県内での生息状況】	県内では低地帯から台地・丘陵帯にかけて生息している。これまで旧大利根町(現加須市)、加須市、蕨市、北本市、さいたま市、東松山市、日高市、越生町、飯能市、皆野町、横瀬町から生息が確認されている。湿った環境のイネ科雑草植物に棲むが、水田のイネに発生した個体を見ることは少ない。				
【特記事項】	古くから著名なイネの害虫であり農業上重要な種であったが、水田から姿を見ることは極めて少なく明らかに個体密度が低くなっており、今後の生息状況に注視が必要なため今回掲載種として加えた。				

科名	カメムシ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
〔和名〕	ヒメナガメ				
〔学名〕	<i>Eurydema dominulus</i> (Scopoli)	指定状況	-		
【形態】	体長 6 ~ 8.5mm。黒色の地に複雑な赤色の条状紋をもち、前胸背に6個の黒色紋をもつ。				
【国内分布】	本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	アブラナ、イヌガラシ、キャベツ、カラシナ、ムラサキハナナなどのアブラナ科植物に生活する。暖地系の種で東北地方では個体数は少ない。同属のナガメ <i>E. rugosa</i> と混生することが多い。				
【県内での生息状況】	県内では、これまで毛呂山町、奥武蔵山地、飯能市、皆野町、小鹿野町、秩父市大滝など台地・丘陵帯から山地帯にかけて生息が確認されている。ムラサキハナナの分布拡大に伴い生息環境は安定的に保たれてはいるものの、近年個体数は減少傾向にあり今後の生息状況に注視が必要。				
【特記事項】	ナガメに似るが、本種の体はやや小さく、赤い条状紋がナガメに比べ複雑に走っているので区別できる。近県ランク 神奈川：絶滅危惧Ⅱ類。				

科名	ノミカメムシ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2015)	DD
〔和名〕	オオメノミカメムシ				
〔学名〕	<i>Hypselosoma matsumurae</i> Horváth	指定状況	-		
【形態】	体長 1.1mm 程度の微小種。光沢のない黒褐色で複眼は大きい。オスは長翅型、メスは短翅型。				
【国内分布】	本州				
【主な生息環境】	谷間の湿地上に生息すると考えられるが、詳細は不明。				
【県内での生息状況】	比企丘陵から記録されたのみで、県内での分布や生息状況は不明。				
【特記事項】	これまで、東日本から数個体が採集されているに過ぎない。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物